

3 平安時代の服装

へいあんじだいのふくそう

知る

■平安時代の服装とは？

平安貴族たちの服装は、延暦十三（七九四）年に都が平安京に移ってから百年ほどの間は唐文化の影響が強く、奈良時代以来の唐風の服装を使用していました。その後、九世紀後半になると、唐の文化に憧れながらも、日本の自然環境に順応した生活様式を形成し、服装もまた独自の形式を生み出していきます。それが絵巻物や祭礼等でよく見る「束帯」や「女房装束（十二単）」などであり、現代の人々のイメージする平安時代の服装とはこれらの衣装を指しています。

この頃の服装の特徴は、曲線的なやわらかさと重ね色目の調和による優雅な服飾美にあり、非常にゆったりとした仕立てになっていました。これは、王朝貴族の生活が座ることを基本の形にしていたためであり、また、湿度が高く蒸し暑い京都の夏に理由があるともいわれています。

■男性の服装

貴族の男性が朝廷で着用する最も正式な服装は束帯です。その束帯に次ぐ礼服には、布袴や衣冠があり、常服には、直衣や狩衣などがあります。

これらの他に、上皇などが外出する際に護衛としてつき従った近衛府の高官が着る隨身姿（御隨身）や、身分の低い武官

の正装である褐衣、傘持・沓持など雑役に従事した仕丁が着用した白張、貴族の元服前の男児が着用した水干、もともとは、庶民の労働着だったものが、平安末期から武士の日常着となった直垂、更には僧侶が着た袈裟や平家物語を弾き語りした琵琶法師の装束といったものが当時の男性の代表的な服装としてあげることができます。

■束帯の着用順序

次のような順序で束帯は着用されます。

- ①：頭に垂纓冠をかぶる。白色の小袖（肌着）を着て、緋色（赤系の色）の大口をはく。足元には襪（指割のない靴下のような足袋）をはく。
 - ②：小袖の上に単を着し、袂をはおり、表袴をはく。
 - ③：袂の上に、長い裾（すそ）のある下襲を更に着る。
 - ④：下襲の上に、最後に袍を着る。
 - ⑤：袍の上から石帯（ベルトのようなもの）を締め、太刀をつり、平緒（腰から前に垂らす飾りの緒）をさげ、畳紙（詩歌の詠草などを記す）を懐にいれる。笏を持ち、浅履（木製の黒漆塗りの沓）をはく。
- 武官の場合は、頭に巻纓冠をかぶり、冠の左右には馬の毛で作った綉と腰には飾矢を入れる平胡籙をつける。

纓：冠の後に付いている布で、立っているのが立纓、垂れているのが垂纓、巻いているのが巻纓です。

大口…下袴の一種で、公家用(赤大口)、武家用(後張の大口)、

幼年用(前張の大口)とがあります。

単…小袖の上から着用する裏のない一重の衣服。

相…単の上に着けた裏付きの衣服。寒暑や好みに任せて数領重ねたものを相重といっています。

表袴…重ねの袴の最上につける袴。束帯の際には白袴を使用。裾を少し上げ赤大口を見せます。

下襲…前側は腰までの丈で後側の裾(すそ)が長い衣服。袴の上に着流します。

袍…束帯の最後に着る衣服。袍の色

は天皇が黄櫨染(茶系の色)、東宮(皇太子)が黄丹(橙系の色)、上皇が赤、諸

臣は四位以上が黒、五位が緋(赤系の色)、六位以下が縹(青系の色)と決められています。

また、束帯姿の袍には、文官および四位以上の武官が着る縫腋袍と、それ以下の武官が着る闕腋袍があります。この二つには縫製に違いが見られ、袖丈の下より裾までが全て縫い合わされているものが縫腋袍、下半身を動きやすくするために切れ目が入れているものが闕腋袍です。



束帯姿(縫腋袍)の図

○**布袴**…赤大口を下袴に、表袴を指貫(表袴より幅広で座りやすく、裾を紐で絞っている)に替えたもの。

○**衣冠**…束帯の略装で、束帯が昼装束と呼ぶのに対して宿装束といわれましたが、やがて平常の参内等にも着用されるようになりました。赤大口をはかず下袴をはき、表袴は指貫に替えます。下襲・石帯・太刀・襪(は用いず、笏の代わりに檜扇(夏は蝙蝠)を持ち、垂纓冠をかぶります。

○**直衣**…貴族が日常着として採用した私服。衣冠と形態は似ていますが、袍の一種である直衣(色の決まりがない)を着用します。日常では冠の代わりに烏帽子をかぶる時もあります。

○**狩衣**…貴族の略装で、もともと狩猟に用いる衣服。衣冠と形態は似ていますが、袍の一種である狩衣を使用します。この狩衣は、袍より身幅が狭く、袖の後側の肩先だけを縫いつけ、あとは明け開いたままの状態

で仕立てられており、袖口にはひも(くくり緒)が通されています。

■**女性の服装**

貴族の女性が、朝廷で着用する正式な服装を女房装束とい、近世以降、衣を十二枚着ているように見えるため、一般に十二単といわれるようになったようです。それに対して、貴族の女性の常服には**小袿姿**があります。

これらの他には、公家や上流武家の女性達の外出着である**壺装束**や、後宮に奉仕する童女の正装である**汗衫**、童女の通常服である**相**といったものが当時の女性の代表的な服装としてあげることができます。

■女房装束の着用順序

次のような順序で女房装束は着用されます。

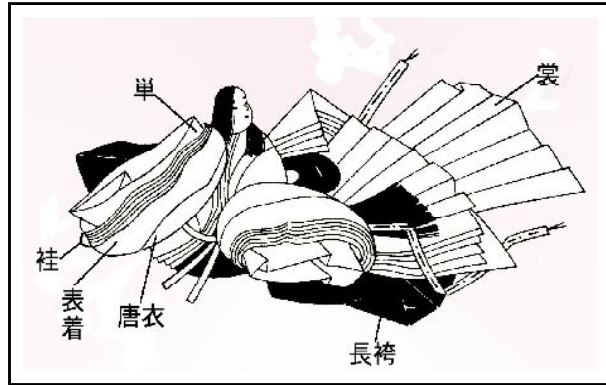
- ①：緋色(紅色)の長袴をはく。
- ②：単を着る。
- ③：単の上に桂 と打衣を着、表着を着る。
- ④：最後に唐衣を着し、襟を折り返す。裳を背後に垂らす。
- ⑤：畳紙を懐にいれ、手には柶 扇(檜の薄板三十九枚でつくられている)を持つ。

桂 …重ね着が基本でその数によつて寒暖の調節を行う衣。袖口や襟元、裾口の色は装飾として用い、その枚数が競われたため、平安時代末期には五枚に限定されました。五衣ともいいます。

打衣 …絹に糊を引いた衣。柔らかな表着の下につけて衣紋を整えるために用いました。形状は桂と同様ですが目立たせないために、表着よりやや小形に仕立ててあります。

表着 …下の桂よりも色目・文様を相違する華麗な織物を用います。重ねの色目を襟や袖などの端からのぞかせるために小振りに仕立ててあります。

唐衣 …禁中に奉仕する女房たちには不可欠な表着の上に着用する腰丈の衣。



女房装束の図

裳 …後腰に巻き付けて長く裾をひく背面だけの衣服。

○小桂姿 …女房装束の略装で、桂よりも裾短に仕立てられた小桂を唐衣の代わりに着したものの。基本的には桂の上に着けるのを本義とし、改まったときには表着を小桂の下に着用しました。また、腰に裳を加える場合もあります。

歩く／見る

以下のような京都の祭礼や資料館では、平安時代を彩った貴族の服装を近くで見ることが出来ます。

■葵祭

五月十五日に行われる京都三大祭の一つです。

行列は、①警護列(檢非違使・山城使)、②幣物列(御幣櫃・内蔵寮史生)、③走馬列(走馬(御馬)・馬寮使)、④勅使列(牛車(御所車)・舞樂人・勅使(近衛使)・内蔵使)、⑤齋王列(齋王代・女人・牛車(女房車))の五部から構成されています。

このように、葵祭の行列には、様々な階層の衣装を着た人々が参列していることから、平安時代の服装を知る上でうつつつけの時代絵巻といえます。

■三船祭

右京区嵯峨朝日町の車折神社の例祭で五月の第三日曜に嵐山の大堰川で行われます。この祭りは、昌泰元(八九八)年、

宇多上皇行幸に際して行われた船遊びにちなみ、昭和三二（一九二八）年の昭和天皇即位大札を記念し、例祭の神事として始められました。三船祭の三船は白河天皇（一〇五三〜一一二九）が大堰川行幸の時、漢詩・和歌・奏楽に長じた者を三艘の船に便乗させた故事によりまします。

車折神社を出発した神幸列は、渡月橋を経て中之島公園剣先から御座船に移乗し、龍頭船では管弦楽、鷗首船では迎陵頻・胡蝶の舞の奉納があり、扇流しも行われます。この祭には、束帯や女房装束などの平安時代の衣装を身にまとった人々が、詩歌船などの船々に便乗して、貴族さながらに優雅な船遊びを再現します。

■時代祭

十月二十二日に行われる京都三大祭の一つです。行列は、計二十列で構成され、明治維新の維新勤王隊列を



時代祭（幕末志士列）長く後に伸びているのが下襲の裾。

先頭に、順次時代を遡り、最後に弓・箭組列が付くといった、各時代の衣装を身にまとった人々が供奉する形式がとられています。中でも、幕末志士列・藤原公卿参朝列・平安時代婦人列・延暦武官行進列・延暦文官参朝列は、平安時代の服装を知る上で貴重な行列です。

■曲水の宴

城南宮（伏見区中島鳥羽離宮町）の平安の庭・楽水苑で春は四月二十九日、秋は十一月三日に行われている行事。「ごく

すいのえん」ともいいます。

平安時代、朝廷で三月上巳（三月最初の巳の日）に三公九卿により行われた遊宴を再現したもので、歌人が流水に沿って列座し、上流から朱の羽觴（はやく飲めというしるしに羽をはさんだ酒杯）が流れてくるまでに、歌題に従って歌をつくり、その酒杯をとって飲む儀式を行います。

本殿でお祓いのもと、水干姿の童子に導かれて登場する歌人達は狩衣・小桂であり、平安時代の貴族の略装を見る上では格好の祭礼です。

■風俗博物館 下京区堀川通新花屋町角（井筒ビル五階）

この博物館は風俗衣装の資料館として昭和四十九年に開館しました。館内には『源氏物語』に出てくる六条院の春の御殿が四分の一のスケールで設置されています。また、飛鳥時代から現代に至る各時代の風俗衣装をまとった等身大の人形三十数体を展示しており、衣装に関する参考資料を多く所蔵しています。

■宇治市源氏物語ミュージアム 宇治市宇治東内

このミュージアムは、『源氏物語』で光源氏没後の世界を描いた「宇治十帖」の舞台となった宇治市に平成十（一九九八）年に開館しました。

常設展示室には狩衣姿の薫君と小桂姿の大君と中の君の人形が展示されています。その他、牛車・舞楽・調度などの品々が、細部に至るまで細かく時代考証によって造り上げられており、平安貴族の世界を十二分に堪能させてくれます。